

令和六年度

「地域と学校の協働」

池田市こども会

かるた指導者養成講座 資料

池田市こども会育成連絡協議会

池田市教育委員会

◆池田市のこども会における「源平合戦」の競技の方法

1. チームの編成：…一チーム三名（うち主将一名）。

（補欠一名は認めるが同一試合内の交代はできない）

2. 使用札：…各チーム五〇枚ずつの持ち札とし、合計百枚とする。

3. ルール

一、チームが向かい合わせに座る。

二、読み手によって読まれた札を取り合う。

三、相手側の札を取ったときは、自分側の札を相手側にそのつど一枚ずつ送る。

四、自分側の札を取ったとき、自分側はそのまま一枚減ることになる。

五、読まれた札と違う他の札に触れたときは、「お手つき」で相手側から札を一枚もらう。

（相手側が一枚減って、自分側は一枚増える）

六、勝敗の決定は、持ち札五〇枚が早く無くなった方の勝ちとする。

◆試合の開始と終了のあいさつはしっかりと！

はじめ「おねがいします」

おわり「ありがとうございました」

それぞれ、相手選手↓審判員↓読み手の順に礼をしながら、それぞれにはつきりと言う。

◆注意点

・読み手が一文字目を読むまでは、手を出してはいけません。読み手の読む一文字目が「よいどん」の合図です。

・必ず利き手を使います。利き手とちがう手で取った場合は取ったことにならず、相手が取ったことになります（反則であるため）。

・取った札は審判員や周りに、正しい札であることを見せてから、ひざ元に裏返しに積み重ねておく。積み重ねる時は横向きに積み重ねておく。

・読まれた札に早く指で触れたとき、または手の平で押さえたときにその札を取ったものとなります。同時の際は、持ち札側の取り札になります。

・「お手つき」を両方がした場合、回数が同じなら札のやり取りは無く、差がある場合は、その差の枚数だけ「送り札」をすることになります。

・一度送った札は変えられないので、送る前にしっかりと作戦を立てて送る方が良いでしょう。相手の陣の札を取ると、また自陣から一枚送れるので、取れる札が良いでしょう。

・送られた札は、送られた側の好きなどところに置くことができます。相手が何かしらの作戦を立てて送られることが多いので、取られにくい下段に置くのが良いです。

・送り札もふくめて、一度並べた札は、タイムをかけた時以外に移動させてはいけません。タイムの時だけ、一回五枚まで移動できます。

・タイムの時以外、読み手は試合を進めてよく、選手はそれを止められません。

【審判】

座席

座席

座席

畳一枚

畳一枚

畳の目4つ分

畳の目1つ分

畳の目2つ分

札(たて)2枚分

座席

座席

座席

【はじめて指導する人のために】

「源平合戦は、百枚覚えた方がもちろん強いですが、百枚覚えていなくても十分楽しめます！」

これを大前提として指導するようにしてください。

そのためには、音別に指導し、少ない枚数から、いろはがるたと同じように適当に並べて少人数のグループに分けて指導していくとよいでしょう。

音別の指導とは、一文字目に来る札が何枚あるのか、ということ意識させることを軸に置いた指導法です。

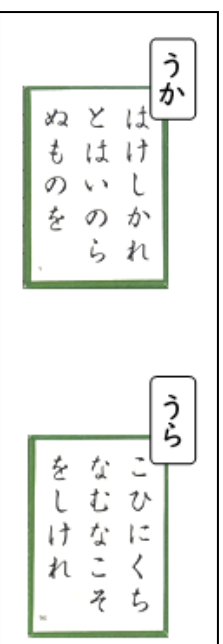
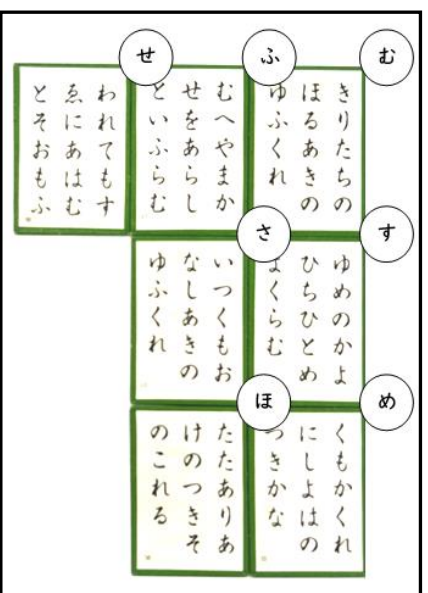
最初は一枚札の指導から始めるとよいでしょう。いきなり試合をするよりも、回り道に見えますが近道です。なぜなら、かるたが暗記勝負ではなく、スピード勝負の側面があることを三枚札の指導に入るまでに実感させた方が楽しく練習できるからです。下図のように、一枚札をこうして見ると、もういろはがるたと変わリません。取り札の字のならびを

映像で覚えたら、もう完全に要領は同じになります。

理想は、「む」と聞いたら「きりたち」

で始まる札が頭に浮かんで手が出るようになることです。この時、文字の字面で覚えていっていると、思い出すのに時間がかかります。取り札を映像で覚えていくことがスピード勝負のコツになります。

慣れてきたら、二枚札の練習です。二枚札は、「決まり字」を意識させるはじめのカテゴリとなります。「決まり字」とは、取り札を判別できる字のことです。例えば下図であれば、「う」で始まる札は二枚ありますが、「う」の後が「か」「ら」でどちらが取り札かを判別できるようになります。これが「決まり字」です。「決まり字」は、例えば「うか」が出た後は「う」で始まる札が残り一枚だけになるように、読み札が増えるたびに変化します。競技かるたでは一対一の勝負なので、全て一人で覚えなくてはなりません。源平合戦はチーム



戦なので、例えば、暗記したかるたの枚数が多くてもスピードに自信がない子が、暗記が弱くともスピードが速い子と協力すれば、それぞれが持ち味を発揮することができます。なぜなら、暗記枚数は少なくとも取るスピードの速い人の近くにその子の覚えている札を置けば、取りやすかったり、取られづかったりするからです。逆であれば、全部の札をそれなりに取れる可能性はあっても、取りこぼしが多くなるかもしれません。送り札の場面などでは、このように一人ひとりが持ち味を意識して作戦を立てると、チームが強くなります。その時にも大事になるのが「決まり字」ですが、意識できるかどうかは、一枚札と二枚札の指導を行う段階で大体決まります。三枚札、四枚札と、段々と難しくなるので、練習の時には、二枚札、三枚札、四枚札、とそれぞれのカテゴリだけで練習したり、一枚札と二枚札、二枚札と四枚札、というように二つのカテゴリを組み合わせた तरीして、取り札の枚数を増やしていきましょう。そして十六枚札までの指導が一通り終わった時、子どもたちの得意・不得意や持ち味が見えます。百枚での試合も楽しくできるでしょう。そうしたら初心者卒業です。

◆初心者向け指導のまとめ

- ①「○枚札」という音のカテゴリ別での指導を意識すること。
- ②三枚札までに、「決まり字」について理解できる指導を意識すること。
- ③はじめは少人数で少ない枚数からいろはがるたと同じように実戦を積む指導を行うこと。
- ④実戦練習で枚数を増やすときは、「暗記札の数を増やす指導」なのか「決まり字を意識できるようにする指導」なのか、目的を明確に持って指導すること。
- ⑤取り札は、映像イメージが頭に浮かぶよう記憶させること。
- ⑥暗唱表や取り札などをつかって、暗記の指導をするときは、必ず決まり字までを声を出して言わせることで、音での理解と映像で記憶した取り札のイメージとを繋げる指導を行うこと。
- ⑦チーム戦での練習の際は、子どもたちがお互いの持ち味を意識し、作戦会議などの試合前の話し合いと試合後の振り返りを行うこと。
- ⑧はじめと最後のあいさつはしっかりとするように指導すること。試合の始めと最後のメリハリをつけられるようになることも、また他者への敬意を示せるようになるのも、上達には大切なことです。

小倉百人一首暗唱表(音別)

大阪府かるた協会暗唱表より

社団法人 全日本かるた協会指定序歌

なにはずに咲くやこの花冬ごもり

いまを春辺と咲くやこの花

(佐々木 信綱先生選)

・は、きまり字

一枚札(むすめふさほせ)

むらさめの露もまだひぬまきのはに	きりたちのぼる秋の夕ぐれ
すみのえの岸による波よるさへや	ゆめのかよひぢ人目よくらむ
めぐりあひて見しやそれともわかぬまに	くもがくれにしよはの月かな
ふくからに秋のくさ木のしほるれば	むべやまかぜを嵐といふらむ
さびしさに宿をたちいでてながおれば	いづこもおなじ秋の夕ぐれ
ほととぎすなきつるかたを眺むれ	ただありあげの月ぞ残れる
せをはやみ岩にせかるるたき川の	われても末にあはむとぞ思ふ

む	きりたちの	せ	われてもす
ほるあきの	むへやまか	ふ	ゑにあはむ
ゆふくれ	せをあらし	せ	とそおもふ
す	いづくもお	さ	
ゆめのかよ	なしかきの	ほ	
ひちひとめ	ゆふくれ	め	
よくらむ			
くもかくれ	たたありあ		
にしよはの	けのつきそ		
つきかな	のこれる		

二枚札(うつしもゆ)

うの部

うかりける人をはつせの山おろし
うらみわびほさぬ袖だにあるものを

はげしかれとは祈らぬものを

こひにくちなむ名こそ惜しけれ

うか

はけしかれ
とはいのら
ぬものを

うら

こひにくち
なむなこそ
をしけれ

つの部

つきみればちぢにものこそ悲しけれ
つくばねの峰よりおつるみなのか

わがみひとつの秋にはあらねど

こひぞつもりて淵となりぬる

つき

わかみひと
つのあきに
はあらねど

つく

こひそつも
りてふちと
なりぬる

しの部

しのぶれど色にいでにけりわが恋は
しらつゆに風のふきしく秋の野は

ものやおもふと人のとふまで

つらぬきとめぬ玉ぞ散りける

しの

ものやおも
ふとひとの
とふまで

しら

つらぬきと
めぬたまそ
ちりける

もの部

もしきや古きのきばのしのぶにも
もろともにあはれと思へ山桜

もも

なほあまり
あるむかし
なりけり

もろ

はなよりほ
かにしるひ
ともなし

なほあまりある昔なりけり
はなよりほかに知る人もなし

ゆの部

ゆふさればかどたの稲葉おとづれて
ゆらのとをわたる舟人かぢをたえ

ゆふ

あしのまろ
やにあきか
せそふく

ゆら

ゆくへもし
らぬこひの
みちかな

あしのまろやに秋風ぞふく
ゆくへもしらぬ恋の道かな

三枚札（いちひき）

いの部

いにしへのならの都のやえ桜
いまこむといひしばかりに長月の
いまはただ思ひたえなむとばかりを

いに

けふこの
へにほひ
ぬるかな

いまこ

ありあけの
つきをまち
いつるかな

いまは

ひとつてな
らていふよ
しもかな

けふこのへに匂ひぬるかな
ありあけの月を待ちいでつるかな
ひとつてならでいふよしもかな

ちの部

ちはやぶるかみよもきかず龍田川

からくれなゐに水くくるとは

ちぎりきなかつみに袖をしばりつつ

すゑのまつ山なみこさじとは

ちぎりおきしさせもがつゆを命にて

あはれことしの秋もいぬめり

ちは

ちぎりき

ちぎりお

からくれな
ゐにみつ
くるとは

すゑのまつ
やまなみこ
さしとは

あはれこと
しのあきも
いぬめり

ひの部

ひさかたのひかりのどけき春の日に

しづこころなく花のちるらむ

ひとはいさ心も知らずふるさとは

はなぞむかしのかに匂ひける

ひともをしひともうらめしあぢきなく

よをおもふゆえにもの思ふみは

ひさ

ひとは

ひとも

しつこころ
なくはなの
ちるらむ

はなそむか
しのかに
ほひける

よをおもふ
ゆゑにもの
おもふみは

きの部

きりぎりすなくや霜夜のさむしろに

ころもかたしきひとりかも寝む

きみがためはるの野にいでて若菜つむ

わがころもでに雪はふりつつ

きみがためをしからざりし命さへ

ながくもがなと思ひけるかな

きりぎりす

きみがためは

きみがためを

ころもかた
しきひとり
かもねむ

わかころも
てにゆきは
ふりつつ

なかくもか
なとおもひ
けるかな

四枚札（はやよか）

はの部

はるすぎて夏きにけらししろたへの
はるのよの夢ばかりなるたまくらに
はなのいろは移りにけりないたづらに
はなさそふあらしの庭の雪ならで

はるす

ころもほす
てふあまの
かくやま

51

はるの

かひなくた
たむなこそ
をしけれ

77

ころもほすてふ天のかぐ山
かひなくたたむ名こそをしけれ
わがみよにふる眺めせしまに
ふりゆくものは我身なりけり

はなの

わかみよに
ふるなかめ
せしまに

76

はなさ

ふりゆくも
のはわかみ
なりけり

96

やの部

やへむぐらしげれる宿のさびしきに
やすらはでねなましものをさ夜ふけて
やまがはに風のかけたるしがらみは
やまざとは冬ぞさびしさまさりける

やへ

ひとこそみ
えねあきは
きにけり

80

やす

かたふくま
てのつきを
みしかな

93

ひとこそみえね秋は来にけり
かたぶくまでの月をみしかな
ながれもあへぬ紅葉なりけり
ひとめもくさもかれぬと思へば

やまが

なかれもあ
へぬもみち
なりけり

10

やまざ

ひとめもく
さもかれぬ
とおもへは

5

よの部

よをこめて鳥のそらねははかるとも
よもすがらもの思ふころはあけやらで
よのなかよみちこそなけれ思ひいる
よのなかはつねにもがもななぎさこぐ

よを

よにあふさ
かのせきは
ゆるさし

よも

ねやのひま
さへつれな
かりけり

よにあふさかの関はゆるさじ
ねやのひまさへつれなかりけり
やまのおくにも鹿ぞなくなる
あまのをぶねのつなでかなしも

よのなかよ

やまのおく
にもかそ
なくなる

よのなかは

あまのをふ
ねのつなで
かなしも

かの部

かくとだにえやはいぶきのさしも草
かささぎのわたせる橋におく霜の
かぜそよぐならの小川のタぐれは
かぜをいたみ岩うつ波のおのれのみ

かく

さしもしら
しなもゆる
おもひを

かさ

しろきをみ
れはよそふ
けにける

かぜそ

みそきそな
つのしるし
なりける

かぜを

くたけても
のをおもふ
ころかな

五枚札(み)

みの部

みせばやなをじまのあまの袖だにも
みちのくのしのぶもぢずりたれ故に
みよしののやまの秋風さよふけて
みかきもりえじのたく火の夜はもえ
みかのはらわきて流るるいづみ川

ぬれにぞぬれし色はかはらず
みだれそめにし我ならなくに
ふるさとさむく衣うつなり
ひるはきえつつ物をこそ思へ
いつみきとてか恋しかるらむ

みせ

ぬれにそぬ
れしいろは
かはらす

みち

みたれそめ
にしわれな
らなくに

みよ

ふるさとさ
むくころも
うつなり

みかき

ひるはきえ
つつものを
こそおもへ

みかの

いつみきと
てかこひし
かるらむ

六枚札(たこ)

たの部

たかさごのをのへの桜さきにけり
たごのうらにうちいでてみればしろたへの
たちわかれいなばの山の峰におふる
たれをかもしる人にせむ高砂の
たまのをよたえなばたえねながらへば
たきのおとはたえて久しくなりぬれど

とやまのかすみたたずもあらなむ
ふじのたかねに雪はふりつつ
まつとしきかば今かへりこむ
まつもむかしの友ならなくに
しのぶることのよはりもぞする
なこそながれてなほきこえけれ

たか

とやまのか
すみたたず
もあらなむ

たご

ふしのたか
ねにゆきは
ふりつつ

たち

まつとしき
かはいまか
へりこむ

たれ

まつもむか
しのともな
らなくに

たま

しのふるこ
とのよはり
もそする

たき

なこそなか
れてなほき
こえけれ

この部

これやこのゆくも帰るも別れては

しるもしらぬも逢坂の関

こひすてふわがなはまだきたちにけり

ひとしれずこそ思ひそめしか

こぬひとをまつほの浦のタなぎに

やくやもしほの身もこがれつつ

このたびはぬさもとりあへずたむけ山

もみぢのにしき神のまにまに

こころあてに折らばや折らむ初霜の

おきまどはせる白菊の花

こころにもあらで浮世にながらへば

こひしかるべき夜はの月かな

これ

しるもしら
ぬもあふさ
かのせき

こひ

ひとしれす
こそおもひ
そめしか

こぬ

やくやもし
ほのみもこ
かれつつ

この

もみぢの
しきかみの
まにまに

こころあ

おきまどは
せるしらす
くのはな

こころに

こひしかる
へきよはの
つきかな

七枚札（おわ）

おの部

おくやまに紅葉ふみ分けなく鹿の

こゑきくときぞ秋は悲しき

をぐらやま峰のもみぢば心あらば

いまひとたびのみゆき待たなむ

おとにきくたかしの浜のあだ波は

かけじや袖のぬれもこそすれ

おもひわびさても命はあるものを

うきにたへぬは涙なりけり

おほえやまいくの道の遠ければ

まだふみもみず天の橋立

おほけなくうき世の民におほふかな

わがたつそまにすみぞめの袖

あふことのたえてしなくばなかなか

ひとをもみをもうらみざらまし

おく

こゑきくと
きそあきは
かなしき

おぐ

いまひとた
ひのみゆき
またなむ

おと

かけしやそ
てのぬれも
こそすれ

おも

うきにたへ
ぬはなみた
なりけり

おほえ

またふみも
みすあまの
はしたて

おほけ

わかたつそ
まにすみそ
めのそて

あふこ

ひとをもみ
をもうらみ
さらまし

わの部

わびぬればいまはた同じなにはなる

みをつくしてもあはむと思ふ

わがいはみやこのたつみしかぞすむ

よをうぢやまと人はいふなり

わがそではしほひにみえぬ沖の石の

ひとこそしらね乾くまもなし

わすれじのゆくすえ迄はかたければ

けふをかぎりの命ともがな

わすらるるみをば思はずちかひてし

ひとのいのちのをしくもあるかな

わたのはらこぎいでてみればひさかたの

くもゐにまがふおきつ白波

わたのはらやそ島かけてこぎいでぬと

ひとにはつげよあまの釣舟

わび

みをつくし
てもあはむ
とそおもふ

わがい

よをうちや
まとひとは
いふなり

わがそ

ひとこそし
らねかはく
まもなし

わすれ

けふをかき
りのいのち
ともかな

わすら

ひとのいの
ちのをしく
もあるかな

わたのはらこ

くもゐにま
かふおきつ
しらなみ

わたのはらや

ひとにはつ
けよあまの
つりふね

八枚札(な)

なの部

なつ[・]のよはまだよひながら明けぬるを
なげけ[・]とて月やはものを思はする
なげき[・]つつひとりぬる夜の明くるまは
ながら[・]へばまたこのごろやしのばれむ
なが[・]からむこころも知らずくろかみの
なに[・]しおはば逢坂山のさねかつら
な[・]にはえのあしのかりねのひと夜ゆえ
な[・]にはがたみじかきあしのふしの間も

くものいづこに月やどるらむ
かこちがほなるわが涙かな
いかにひさしきものとかは知る
うしとみしよぞ今は恋しき
みだれてけさは物をこそ思へ
ひとにしられて来るよしもがな
みをつくしてやこひわたるべき
あはでこのよをすぐしてよとや

なつ

くものいつ
こにつきや
とるらむ

なげけ

かこちかほ
なるわかな
みたかな

なげき

いかにひさ
しきものと
かはしる

ながら

うしとみし
よそいまは
こひしき

ながか

みたれてけ
さはものを
こそおもへ

なにし

ひとにしら
れてくるよ
しもかな

なにはえ

みをつくし
てやこひわ
たるへき

なにはが

あはてこの
よをすくし
てよとや

十六枚札(あ………しひけはらきまりさ)

あの部

あし[・]びきのやま鳥の尾のしだりをの
あひ[・]みてののちの心にくらぶれば
あけ[・]ぬればくるるものとは知りながら
あは[・]ぢしまかよふちどりの泣く声に

ながながしよをひとりかも寝む
むかしはものを思はざりけり
なほうらめしき朝ばらけかな
いくよねざめぬ須磨のせきもり

あはれともいふべき人は思ほえて

あらしふくみむろの山のもみぢばは

あらざらむこのよのほかの思ひでに

あきのたのかりほのいほのとまを荒み

あきかぜにたなびく雲のたえまより

あまつかぜくものかよひぢ吹きとぢよ

あまのはらふりさげ見れば春日なる

ありまやまいなのささ原風ふけば

ありあけのつれなく見えし別れより

あさぢふのをのしの原しのぶれど

あさばらけありあけの月と見るまでに

あさばらけうぢのかはぎりたえだえに

みのいたづらになりぬべきかな

たつたのかはの錦なりけり

いまひとたびのあふこともがな

わがころもでは露にぬれつつ

もれいづるつきの影のさやけさ

をとめのすがたしばしとどめむ

みかさのやまにいでし月かも

いでそよひとを忘れやはする

あかつきばかりうきものはなし

あまりてなどか人の恋しき

よしののさとにふれる白雪

あらはれわたるせぜのあじろぎ

あし

なかなかし
よをひとり
かもねむ

あひ

むかしはも
のをおもは
さりけり

あけ

なほうらめ
しきあさほ
らけかな

あはぢ

いくよねさ
めぬすまの
せきもり

あはれ

みのいたつ
らになりぬ
へきかな

あらし

たつたのか
はのにしき
なりけり

あらざ

いまひとた
ひのあふこ
ともかな

あきの

わかころも
てはつゆに
ぬれつつ

あきか

もれいつる
つきのかけ
のさやけさ

あまつ

をとめのす
かたしはし
ととめむ

あまの

みかきのや
まにいてし
つきかも

ありま

いてそよひ
とをわすれ
やはする

ありあ

あかつきは
かりうきも
のはなし

あさじ

あまりてな
とかひとの
こひしき

あさばらけあ

よしののさ
とにふれる
しらゆき

あさばらけう

あらはれわ
たるせせの
あしろき

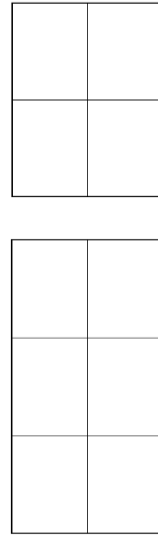
【机を使った教室でのかるた練習・指導について】

① 4～6つの机を向かい合わせ、班の形にするとやりやすくなります。

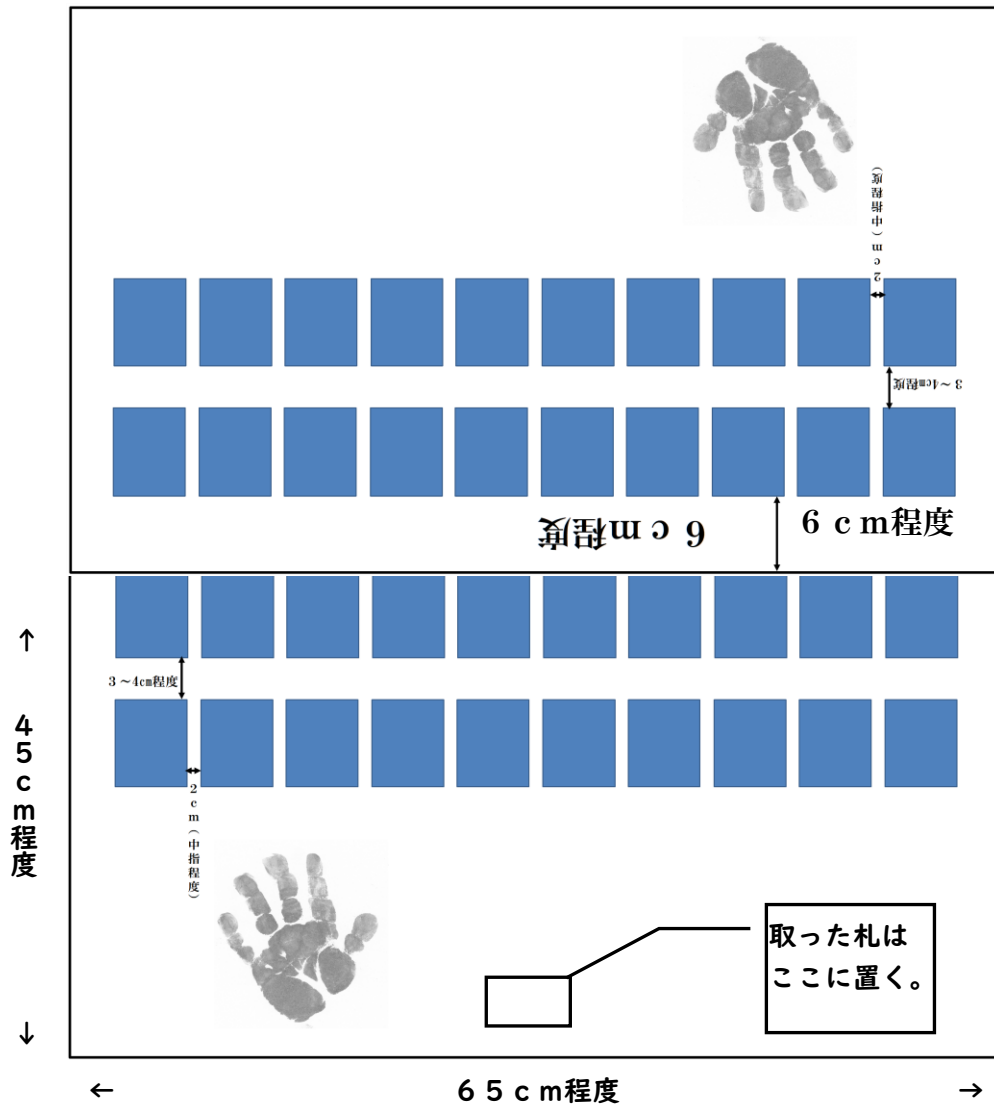
机4つ…80枚程度まで使って試合形式で練習できます。

机6つ…100枚使って試合形式で練習できます。

※机1つあたり20枚程度のせることが可能なため、「○枚札」という音の力
テゴリ別での指導の際は、机4つ、空札（読まれることがあっても取り札の無
い札）して試合をする時には机6つ、という風に使い分けると良いでしょう。



② 取り札として置く札が決まったら、試合形式の場合はその札をていねいにな
らべましょう（右図）。取り札が一枚札だけ、だとか三枚札だけ、という風に少
ない時には、いろはがるたなどのように、ある程度ランダムに並べても良いです。



- ・ 右手で取る時は図のように左手を、左手で取る時は、逆に右手を机に置いて取る（取り手は必ず片方で固定）。読み手が読み始めるまでは、両手ともに机に置いておく。
- ・ 距離は目安。競技者の指などである程度はかれるなら、それで良い。

③席替えのたびにチームを変え、メンバーは固定しない方が良いでしょう。

メンバーを固定すると、ドッジボールなどと同様、勝負事重視になるとともに、クラス内で子どもたちの間で階層ができてしまう可能性が高く、チーム戦ならではのよさを体験できない可能性が高くなります。

④「読み手が読み始めたらずかにする」ということは徹底しましょう。一枚札、二枚札など、決まり字が早めのカテゴリの指導の時にこれをしておくと、「なぜうるさくしたらダメなのか」を子どもたちが実感しやすく、「聞く力」自体の向上にもつながります。

そのため、特に前の下の句を読んでいる最中や上の句の最初の五文字程度を読み終わるまでに、取り札を取る以外の音・声が鳴った場合は、また前の下の句から読み直して始める、というような指導をしていくといいでしょう。「静かにしなさい」などの言葉での矯正的な要素の強い指導の時間はなるべく減らしましょう（上の句に入ってからでも、順番を変えるなどしてでも読み直した方が良いでしょう）。

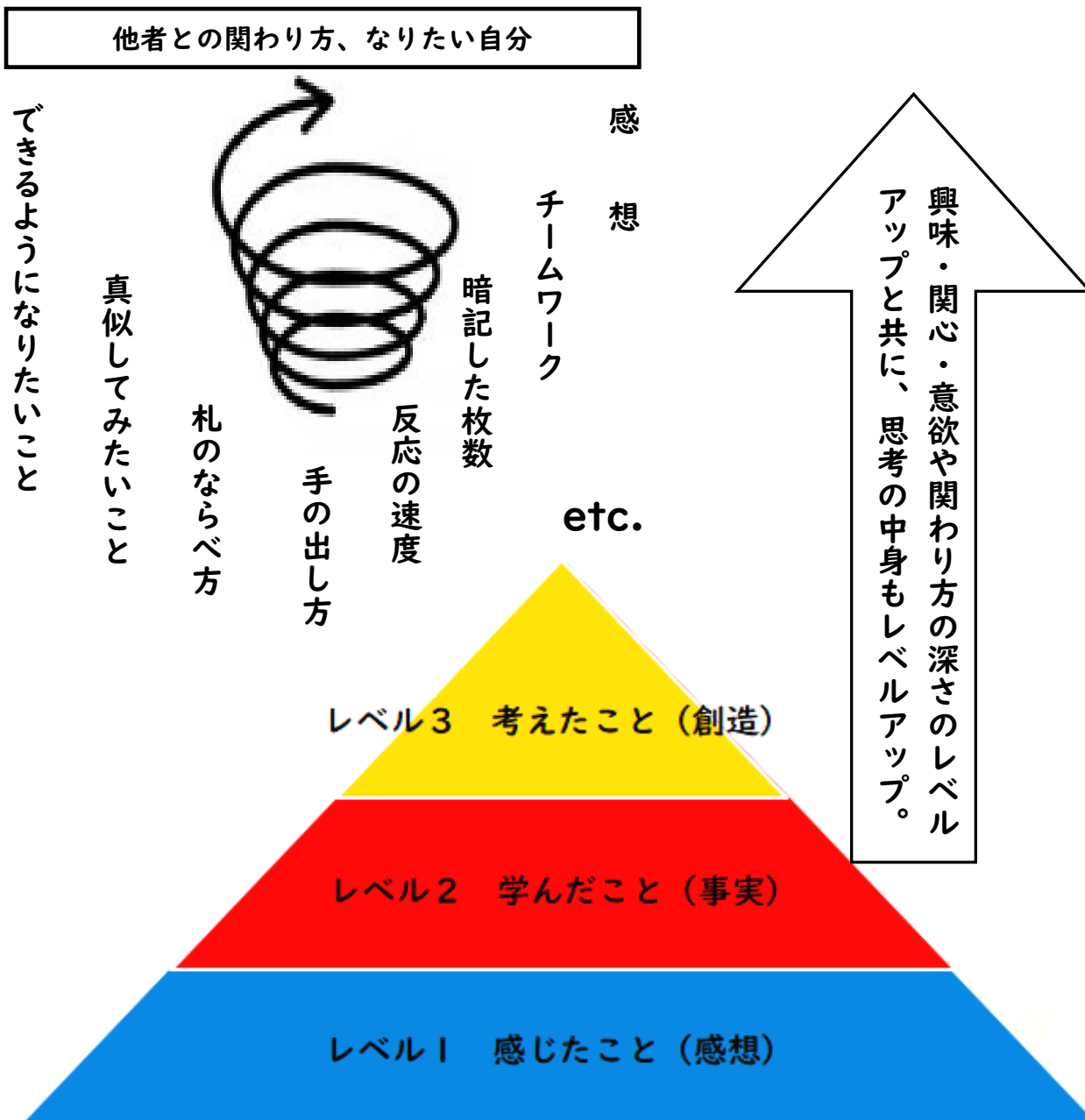
きみがため
おしからざりし
命さへ

太字のところは、一文字目と決まり字。特に気を付けて確実に発音する。
節を作って音がボケないように
気を付ける（決まり字が五文字
目を超える時は特に間延びしないように読む）



⑤読み手は、読む時に一音目と決まり字について特にはつきりと発音するように心がけることが大切です。スピードやスマートさよりも聞きやすさ。

初心者の中には、節を付けるのはネット上の試合の動画を見て、気持ち程度真似するくらいで良いでしよう。聞きやすさが第一です。



⑥ かるたの練習をした後は、必ずふりかえりの時間を取ります。ロイノートなどにつづっていくと良いでしょう。はじめのうちは、「感想」のみから。半分以上くらい覚えている子が増えてきたら「自分のできたこと、できなかったこと」も振り返るようにし、また全部覚えている子が多くなってきたら、「これからどうしていいかと思うか」と、興味・関心や取り組みのレベルが上がるごとに、ふりかえりもレベルアップしていくと良いでしょう。ほとんど覚えていない子、興味・関心のない子に無意味に長いふりかえりを書かせるのは、活動への拒否反応を招く原因になります。

ふりかえりをしっかりとっていくことで、自己指導力が向上するのは勿論、どんなメンバーになってもチームの戦術を考え付くようになっていきます。それは他者への関心や理解が深まり、子どもたちの合意形成する力や、自己実現、社会参画しようとする資質・能力が向上したあらわれです。